

平成31年3月30日

富士山本宮浅間大社 御中

静岡市葵区大岩1丁目4-4  
株式会社 墨 仁 堂  
代表取締役 山口 聡 太郎



修理報告書

平成30年度

## I. 修理前の状況

### 1. 品質形状及び寸法

絹本著色. 掛幅装

一文字風帯：白地牡丹文金襴

中廻し：茶地卍地雲車文金襴

総縁：萌黄地二重蔓牡丹文金襴

軸首：金軸

箱：外箱、杉被せ箱. 中箱、黒漆塗屋郎箱（布帙付、箱書きあり）

### 2. 本紙寸法

縦 180.2×横 117.8 cm

### 3. 破損状況

・本紙は絹3枚が継がれて一枚となる構造である。その継ぎ手の影響によって、表具全体は波打って暴れが生じている。結果、継ぎ手を中心として縦折れ、亀裂が生じ、さらに肌裏紙と本紙画絹の剥離が起きている。

・絵具層の剥落が、画面全面に見られる。特に絹の継ぎ手周囲では、剥落が進行している。

・絵具層の剥落は4種に分けられる。一つは表層絵具が剥落し下地層が露出している箇所。2つめは表層絵具と下地層ともに剥落し、本紙画絹が露出している箇所。3つめは表層具と下地層は残っているが、裏彩色が欠失している箇所。4つめはすべて欠失している箇所である。

・表面からの観察からは、裏彩色は全面に施されているように推測される。ただ、すでに失われている箇所が多く、その部分は色が暗く沈んで見えている。

・本紙画絹は健全な状態であるところが大部分である。しかし、本紙上部空の部分などには小面積の画絹の欠失が見られる。また、画絹の形成が緩み糸が浮いてきている箇所が、画面の所々で散見される。

・本紙上部、空の部分に染みが見られる。

・現在あたっている肌裏紙は、濃い墨色があたっていると思われ、画面を暗く沈んだ印象を見せている。

・画面全面はカビ跡が散見される。

## II. 修理方針

### 1) 調査

通常の写真撮影のほかに、必要に応じて顕微鏡写真、本紙透過写真、赤外写真を撮影する。  
本紙の損傷状況を記録するため損傷地図を作成する。  
絵具の発色を記録するため、分光測色計にて計測する。

### 2) 作業開始前の処置

修理前の目視観察によって確認された、絵具層の浮き上がりや画絹の亀裂、剥離には、応急的に兎膠と布海苔の混合糊を差して接着し、作業中の安全を確保する。

### 3) クリーニング

準備として、絵具の劣化度合と耐水性の確認テストを事前に行う。必要であれば、クリーニングの前に、絵具層の剥落止めのため、膠水溶液を塗布する。  
クリーニングは、吸水紙を本紙下に敷き、本紙画面上から純水（RO（逆浸透膜）濾過システムによって精製された水）を噴霧して、下の吸水紙に水分とともに汚れを吸着させる方法をとる。特に強い染みが見られる部分は集中して純水滴下によるクリーニングを行う。

### 4) 剥落止め

クリーニングを行ない煤汚れを除去した後に、兎膠水溶液にて絵具の剥落止めをおこなう。

### 5) 肌裏紙除去

肌裏紙除去には乾式肌上法を用いる。

レーヨン紙と布海苔を用いて、本紙の表打ちを行い表面の保護をした後に、少量の水を裏打紙に少しずつ与えて糊の接着を弱め、肌裏紙を繊維状に解しながら除去する。

### 6) 補絹

本紙画絹の調査を行い、同じ糸の太さと打ち込み間隔の絵絹を、新たな補絹として用意する。  
用意した絵絹は電子線照射により強制劣化させて、本紙画絹の強度に合わせる。  
修理前と同様の本紙寸法となるよう、本紙四辺には足し絹を行う。

### 7) 肌裏打

肌裏紙の色味は、画面の濃淡に強い影響を与える。そのため、画面がもっとも良く見える色の裏打紙を選ぶ必要がある。数種の色味のサンプル作成し、本紙に当てて比較して色味を決定することとする。

美濃紙を、天然染料と墨にて求める色味に染色し、肌裏紙として使用する。

画面の中にできるだけ紙の継ぎ手が入らないよう、できるだけ大判の美濃紙を選ぶこととする。

#### 8) 増裏打

肌裏紙同様に画面の濃淡を整えるため、数種の色味のサンプルを当てて比較し、最も適する色味にて染色した美柄紙を使用することとする。

#### 9) 折れ伏せ

横折れ箇所には、増裏打後に折れ伏せを入れて補強する。折れ伏せを入れるべき所が、非常に多く、その際の水分による伸縮が本紙に影響を与える可能性があるため、一度仮貼りをしてから折れ伏せを入れる。

#### 10) 表具裂

表具裂、軸首はすべて新調する。

中廻し風帯：金欄

総縁：綾

軸首：金軸（社紋入り）

#### 11) その他の裏打について

通常の表具仕立方法に則り、中裏打、総裏打と重ねていく。その際の紙の厚み、色味等は本紙と裂の状況に応じて選定する。

#### 12) 箱

太巻添軸付屋郎箱、黒漆塗台指箱を新調する。

### Ⅲ. 修理工程

1. 修理前に現状の写真撮影を行った。必要に応じて顕微鏡写真、本紙透過写真、赤外写真を撮影した。採寸及び損傷等の調査を行い現状の記録をした。
2. 本紙の損傷状況が一覧できる損傷地図を作成した。
3. 絵具の発色を記録するため、分光測色計による計測、蛍光 X 線分析を行った。
4. 表具を解体し、軸木を取り外した。
5. 裏面から、表に回らない程の水を少量噴霧し、総裏紙、増裏紙などを除去した。
6. 柔らかい筆などを用いてドライクリーニングをし、表面の埃やゴミを除去した。
7. 本紙の下に吸水紙を敷き、画面上から純水を噴霧し、汚れとともに下に吸水してクリーニングを行った。
8. 膠水溶液にて絵具の剥落止めをした。  
(この途中までは平成 29 年度に行った。以後 30 年度工程)

9. 布海苔とレーヨン紙にて表打ちを行い、表面の絵具を保護した。



10. 本紙への湿りが極力少なくなるようにして、少しずつ旧肌裏紙を除去した。(乾式肌上法)



- 1 1. 新しく電子線劣化絹を作成し、  
本紙欠損箇所に添付した。



- 1 2. 染美濃紙を用いて、本紙の肌裏  
打をした。

- 1 3. 表具裂を新調した。

- 1 4. 美濃紙にて表具裂の肌裏打  
をした。



- 1 5. 本紙、表具裂それぞれの増裏打  
をした。



16. 本紙折れの部分に折れ伏せを入れ補強した。

17. 本紙、表具裂それぞれを中裏打した。

(平成30年度はこの工程の途中まで行った。)

